

レベル別 日本語多読 ライブラリー

にほんご よむよむ文庫

レベル **4** vol.1 **5**

野菊の墓

子^こどものときから一緒^{いっしょ}に育^{そだ}った
民子^{たみこ}と政夫^{まさお}はとても仲^{なか}がいい。し
かし、民子^{たみこ}が年上^{としうえ}なので、周り^{まわ}の
人^{ひと}たちの目^めは冷^{つめ}たかった。二人^{ふたり}の
あわ ばつこい けつまつ
淡い初恋^{たんいこい}の結末^{けつまつ}は？

これまでに何回^{なんかい}もテレビドラマや
えい が いどうさ ち お だいひょうさく
映画^{えい}になった伊藤左千夫^{いどうさ ち お だいひょうさく}の代表作^{だいひょうさく}。

にほんご よむよむ文庫



これは、日本語^{にほんご}を勉強^{べんきょう}している人^{ひと}のための「読みもの」シリーズで
す。4レベルに分かれていて、昔話^{むかしばなし}、創作^{そうさく}、名作^{めいさく}、伝記^{でんき}などいろい
ろな話^{はなし}があります。レベルごとに言葉^{ことば}や文法^{ぶんぽう}が制限^{せいげん}されていて、読
みやすく書^かかれています。漢字^{かんじ}には全てひらがなが付^{すべ}いていますから、辞書^{じしょ}を引^ひかないでどんどん読^よんでみましょう。

レベル	クラス	語彙数	文字数／1話
1	初級前半	350	400～1500
2	初級後半	500	1500～2500
3	初中級	800	2500～5000
4	中 級	1300	5000～10000

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

の ぎく はか
野菊の墓

原作（げんさく）：伊藤 左千夫（いとう さちお）

簡約（かんやく）：近藤 眞須子（こんどう ますこ）

挿絵（さしえ）：山中 桃子（やまなか ももこ）

監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

<監修者紹介>

NPO法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ることを目的に、日本語教師が集まって、2002年1月に発足しました。2006年9月にNPO法人になりました。「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」授業の実践・研究をしています。<http://www.nihongo-yomu.jp>

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル4] vol.1

野菊の墓

2006年10月10日 初版 第1刷 発行

2008年 9月29日 初版 第2刷 発行

原作：伊藤 左千夫

簡約：近藤 真須子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：山中 桃子

監修：NPO法人 日本語多読研究会

ナレーション：大山 尚雄／篠原 明美

録音・編集：スタジオ グラッド

デザイン・DTP：有限会社トライアングル

発行人：天谷 修平

発行：株式会社アスク出版

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町2-6

TEL.03-3267-6864 <http://www.ask-digital.co.jp>

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

©NPO法人 日本語多読研究会 2006

Printed in Japan ISBN978-4-87217-627-8

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

の ぎく はか
野菊の墓

原作（げんさく）：伊藤 左千夫（いとう さちお）

簡約（かんやく）：近藤 眞須子（こんどう ますこ）

挿絵（さしえ）：山中 桃子（やまなか ももこ）

監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

のぎく はな さ きせつ
野菊の花が咲く季節になると、ぼくは必ず思い出すことがある。

じゅうねん いじよう まえ
もう十年以上も前だが、昨日のここのようだ。そのときのことを思い出すと、今でも涙が出る。

とうきよう ひがし ほう えど がわ かわ わた
東京の東の方にある江戸川という川を渡ると、そこがぼくの村、矢切村だ。ぼくの家族は、
むかし
ずっと昔からそこに住んでいる。「矢切村の斉藤さん」といえば、知らない人はいないほど大き
いえ
い家だ。

いは はは あに あに つま いえ しごと
ぼくの家には、母とぼく、兄と兄の妻、家の仕事をするお増、そして親戚の民子が住んでい
はは からだ よわ
た。ぼくの母は体が弱かったので、民子は母の世話をするためにぼくの家に来ていたのだ。

じゅうさんさい たみこ にさいうえ じゅうごさい たみこ
ぼくは十三歳、民子は二歳上の十五歳だった。民子はやせていたけれども、丸顔で色が白か
げんき あか おんな こ
った。元気で明るい女の子で、ぼくととても仲が良かった。民子は掃除をすと言ったり、お

茶やお菓子を持ってきたと言ったりして、よくほくの部屋に入ってきた。そして、

「政夫さんはいつも本を読んでいるのね。私も本を読みたい。字も習いたい」

と言った。また、時々、ほくの背中をたたいて逃げていく。ほくも民子を見ると、「ほくの部

屋で遊ぼうよ」と言った。二人で遊ぶのは、とても楽しかった。



しかし、母はいつも民子を叱った。

「民さん、また政夫の部屋へ行つたね。政夫の勉強の邪魔をしてはいけないよ。民さんは年が上なんだから」

こんなことを言つて叱るが、母は民子をとてかわいと思つていた。そして、ぼくと民子を姉と弟のようだと思つていた。それを知つていたので、ぼくも民子も、母に注意されても一緒に遊ぶのをやめなかつた。その頃のぼくには、民子への特別な気持ちはなかつたし、民子にもそんな気持ちはなかつた。

母に何度注意されても、民子は朝ご飯だ、昼ご飯だと言つて、ぼくを呼びに来る。そして、部屋に入つてきて、本を読んだりしてしばらく遊んでいる。特に用事がなくても、ぼくの部屋の前を通るときは、必ずぼくの部屋に入つてきた。民子が来ない日は寂しくて、「今日は何をしているかな」と、部屋を出て探したこともあった。民子もぼくも、一緒にいるだけで楽しかった。

そんな民子を見て、お増は、

「民さんはいつも政夫さんの部屋にいるんだよ」

と、近所の女たちによく話していた。それで、村中の人が「二人は仲が良すぎるんじゃないか」と話すようになった。

それを聞いた兄の妻が、ある日、母に注意した。驚いた母は、その夜、ぼくと民子を自分の部屋に呼んだ。

「おまえたちはもう小さい子どもじゃない。村の人たちがおまえたちは仲が良すぎると言っているそうだ」

母の顔はいつもと違ってとても厳しかった。

「民さん、おまえは年が上なんだから気をつけなさい。これからは政夫の部屋へ行つてはいけないよ。政夫も、来月から千葉の中学校へ行くんだから……」

民子は恥ずかしさで顔を真っ赤にして下を向いていた。いつも、叱られても言い返しているのに、この日は違った。

「お母さん、それはひどい。だれが何と言っ
てもかまわないよ。ぼくたちは悪いことなん
かしてないんだから。お母さんは、ぼくと
民さんは姉と弟のようなものだ、仲良くしな
さいと、いつも言ってたじゃないか！」

ぼくは怒って部屋を出た。

そのときから、民子はすっかり変わった。
多くの部屋には来ないし、家の中で会っても
何も言わない。そして、急いで行ってしまう。
時々、用事があるときも、すぐく丁寧
な言い方をするのだ。二人の間には、目に見
えない壁ができたようだった。



ある日ひの夕方ゆふがた、ぼくは母ははに頼たのまれて、裏うらのなす畑ばたけでなすを採とっていた。

「政夫さん……」

ぼくは急きゆうに呼よばれてびっくりした。後うしろを向むくと民子たみこが立たっていた。

「私もわたし、おばさんおばさんに頼たのまれてきたのよ」

民子たみこはともうれしそうだった。

母ははは元氣げんきがない民子たみこを見て、かわいそうに思おもったのだろう。民子たみこはにこにこしながら、なすを採とり始はじめた。なす畑ばたけは高い所たかところにあり、下したには川かわが見みえ、遠とおくやまやまの山々ふじさんや富士山ふじさんも見みることができた。秋あきの空そら、夕日ゆうひの光ひかりを浴あびて、ぼくたち二人ふたりは、まるで絵えの中なかにいるようだった。

「まあ、すばらしい景色けしき……」

民子たみこもぼくも、しばらくなすを採とるのをやめて、その景色けしきを見みていた。



ぼくは民子たみこの横顔よこがおを見て、その美しさうつくに気がついた。これまでもかわいいと思つたことはあるが、今日は美しいと思つた。やわらかく黒く光る髪くろ ひか かみの毛け、その下から少し見える耳みみ、白く美しい顔しろ うつく かお、細い首ほそ くびのまわり。

— なんて美しいんだろう —

このときのぼくは、十日前とおかまえのぼくではなかつた。二人ふたりは、今までのような友だちではなかつた。いつ、そういう気持ちきもちが起きたのか、ぼくには少しもわからなかつた。母ははに叱しかられた頃から、ぼくの胸むねの中に、小さな「恋の卵こいのたまご」が生まれていたのであろうか。この日初めて、ぼくは民子たみこを女おんなとして見たのだ。

この十日間、民子とはほとんど話していなかったから、ぼくは何か話さなければいけないよ
うな気がした。

「民さん……」

ぼくは民子の名前を呼んだけれど、後の言葉が出てこなかった。

「政夫さん、何？」

「何でもないよ。何でもないけど、この頃、民さん変だからさ。ぼくのことをすっかり嫌いに

なつたようだね」

「まあ、私がいつ政夫さんのこと嫌いになりました？」

「でも、この頃、民さんはすっかり変わってしまったて、ぼくのこととは忘れたみたいだから」

「そんなこと言うなんて、政夫さん、ひどいわ。おばさんに叱られてから、私、一生懸命気

をつけているのよ」

民子は泣き出しそうな顔で、ぼくの顔をじつと見た。

「ぼくは怒おこって言いったんじゃないんだ。ただ、民たみさんが急きゆうに変わかわって、会あつても何なにも言いつてくれないし、遊あそびにも来こないから寂さびしかったんだ。だから、これから時々遊あそびに来こいよ。お母かあさんに叱しかられたら、ぼくが悪わるかったと言いうよ」

ぼくがこんなことを言いうので、民たみこ子は困こまつているようだったが、同どう時じにとともうれしそうだった。そして、話はなしているうちに、すっかり元もとの元氣げんきな民たみこ子になった。ぼくもうれしくなつた。

二人ふたりは、まるでこの世よの中なかにはぼくたちしかないという氣持きもちになつて、残のこりのなすを一生懸命いっしょうけんめい採とつた。

なす採とりが終おわつて氣きがつくと、日ひは西にしの山やまの向むこうに沈しずもうとしていた。

「民たみさん、見みて。夕ゆう日ひがきれいだよ」

「まあ、本ほん当とう」

民たみこ子はなすを入いれたかごを下したに置おき、手てを合あわせて夕ゆう日ひを拝おがんだ。ぼくはこのときたみこの民たみこ子を、ずつと忘わすれることができない。

二人が話をしながら帰つてくると、お増が家の前に立つてこちらを見ている。

「お増がまた何か言いますよ」

「ほくも民さんも、お母さんに頼まれてなす採りに行つたのだから、お増が何と言つても大丈夫だよ」

この日から、二人の「恋の卵」は、どんどん大きくなっていくようだった。民子は、またぼくの部屋に来るようになったが、いつもだれかに見られていないか気にするようになった。「遊びに来いよ」と言つたぼくも、民子が長くいると、人に何か言われるのではないかと心配になった。結局、二人はしばらくの間、話さないことにした。

三二

ぼくの村では秋祭りの前に、畑の仕事を全部終わらせなくてはならなかった。

ある日、母は、ぼくと民子に山の畑の綿を採ってくるように言った。母の言葉に、ぼくも民子も驚いた。ぼくも民子も、心の中ではとてもうれしかったが、その気持ちを外には出さなかった。喜んでいと言われるのが嫌だったからだ。きつと兄の妻やお増は、母やぼくたちがいないところで、「お母さんは何を考えているんだらう。あの二人と一緒に山の畑に行かせるなんて」と言っているだらう。

二人はなかなか出かけようとしなかった。母は二人を急がせた。

「早く行きなさい。山の畑までは遠いのだから、早く行かないと帰りが遅くなる。夜にならないうちに帰ってくるんだよ」

そして、お増に、二人の弁当を作るように言った。

二人は一緒に出かけるところをだれにも見られなくなかった。ぼくが少し早く出かけ、村を出たところで、後から民子が歩いてくるのを待った。民子が来ると、二人は一緒に歩き始めた。今日は急いで綿を採って、面白いことをして遊ぼう、などと話しながら歩いていった。

道の両側にいろいろな草花が咲いている。その中に野菊があった。



「民さん、ほら、野菊」

ぼくは足を止めたが、民子は聞こえないのか、
 どんどん歩いていく。ぼくは野菊を採った。民
 子はしばらく一人で歩いていたが、ぼくがいな
 いことに気づいて、急いで戻ってきた。

「政夫さん、何をしていたの？ ……まあ、き

れいな野菊。私、本当に野菊が好きなの。半分、
 私にくれない？」

ぼくは野菊を民子に渡した。

「ぼくも前から野菊が大好きさ」

「私、野菊を見ると涙が出てくるの。なぜだ
 かわからないけど、不思議なくらい野菊が好き
 なの」

「民さんは、そんなに野菊が好きなのか。だから民さんは野菊のような人なんだ」

民子は、野菊を大切そうに胸に抱きながら歩き始めた。そして、しばらくするとぼくに聞いた。

「政夫さん、私が野菊のようだって……、どうして？」

「さあ、どうしてって……、民さんは野菊のようだからさ」

「政夫さんは野菊が好き？」

「ぼく、大好きさ」

こんな会話でも、二人とも胸がどきどきして、これ以上話ができなくなってしまうた。二人はしばらく何も言わずに歩いた。本当に民子は野菊のようだった。かわいくて優しかった。

二人はしばらく黙っていたけれど、いつまでも黙っているのは変なので、ぼくは言った。

「民さん、さつき、ぼくが野菊を採っていたとき、何を考えていたの？」

「私、何も考えていません」

「うそだよ。隠さなくてもいいじゃないか」